

次世代型農業の確立を通じて 地域交流と貢献を目指す。

新事業として、次世代型農業による高糖度トマトの栽培に
取り組む農機具メーカーの構想と行動力。



「美味しい!これしかない!」 一瞬で心が決まった高糖度トマトの栽培。

「地域に溶け込み、貢献できる新事業を」と、寺田会長が白羽の矢を立てたのは、当時、経営企画室に所属していた宮崎一彦氏。平成24年12月のことだった。宮崎氏は「地域に貢献できること」として、介護事業所やスーパーマーケット、外食産業の誘致など、考えられることを列挙して可能性を探った。ところが「採算が合わない」「人材確保が困難」など、どれも事業として成り立たないことが判明。そんな中「ほとんどの養父市民は農業が生業。まずは地域に溶け込むために、新事業のテーマを農業にしよう」と思い立つ。農業の経験が無かった宮崎氏は、あらゆる人や機関に相談を持ちかけたところ、ようやく農業の技術支援を行う団体の紹介を受けることになった。

「その団体がトマトを持ってきてくれました。トマトを食べたとたん『これだ!』と心が決まりました。とにかく美味しくビックリしたのです。」

そのトマトとは、糖度が果物レベルに高い高糖度トマトを、土を使わず特殊フィルムを使った次世代型農業システム「アイメック農法」で栽培したものだった。折しも「メタボ対策に役立つ」としてトマトブームが到来し、糖度の高いフルーツトマトが注目され始めた平成25年のことだった。



話題づくりで各所にアピールし、 養父市を次世代型農業の拠点に。

宮崎氏は、「次世代型農業のシステムで美味しい高糖度トマトを作ること、養父市が次世代農業の拠点になり、注目されると考えました」と語る。新しい農業を提唱するなら、収穫した作物の売り方も示さなくてはならない。宮崎氏は、親しみやすいキャラクターで高濃度トマトの浸透を図ることも事業計画に組み入れ、養父市商工会の協力を得て、キャラクター「甘えん坊の赤オニくん」を誕生させた。販路は、価格を生産者が決定できる道の駅などの直売所とした。

初めての収穫は平成26年3月。新聞社にプレスリリースを行い、新聞記事で販売開始をアピールしながら、



道の駅で販売したところ「新聞で見た」と200g入り400円という価格にも関わらず飛ぶように売れた。収穫量が少なく売り切れ状態が続き、「入手困難」の噂が広がったことも功を奏し、地域住民から「分けて欲しい」と同社に連絡が殺到したという。

初めての収穫から2年目の平成27年、養父市が農業の担い手を確保し、耕作放棄地の解消や6次産業の推進により地域経済の活性化を図る国家戦略特別区域に指定された。これを受けて同社は、養父市が制度化した「養父市アグリ特区保証融資制度」の第1号として融資を受けることが決定し、新聞で報じられた。

「地域No.1のトマトを目指して頑張る中、環境配慮も重要と、ビニールハウス内を加温する燃料を養父市内で産出された間伐材を使うなど工夫しています。」

また、当初、毎日の出荷量は約40kgでしたが、現在は約100kg。道の駅だけでなく、一部のスーパーマーケットでも販売しており、香港にも出荷しています。今後の課題は、味の安定化です。そして、将来は、トマトの加工品も手がけて行きたいと考えています。」

環境配慮も含めた次世代型農業を通じた地域貢献は始まったばかり。同事業部の今後の展開に目が離せない。



八鹿鉄工株式会社
アグリ事業部部長
宮崎 一彦氏

昭和16年、軍需品の下請け工場として創業した八鹿鉄工株式会社は、戦後に農機具の開発を手がけ、開発力と技術力で順調に成長を遂げた。時代の流れで製造拠点は海外にシフト、国の政策に左右される農機具製造の未来を危惧した同社寺田幸雄会長が「自社の敷地を活用して、地域交流と貢献のできる新事業を立ち上げて欲しい」と、一人の社員に告げた。



八鹿鉄工株式会社

〒667-0024 兵庫県養父市八鹿町朝倉200番地
TEL 079-663-2333
<http://yoka-tekko.com/>